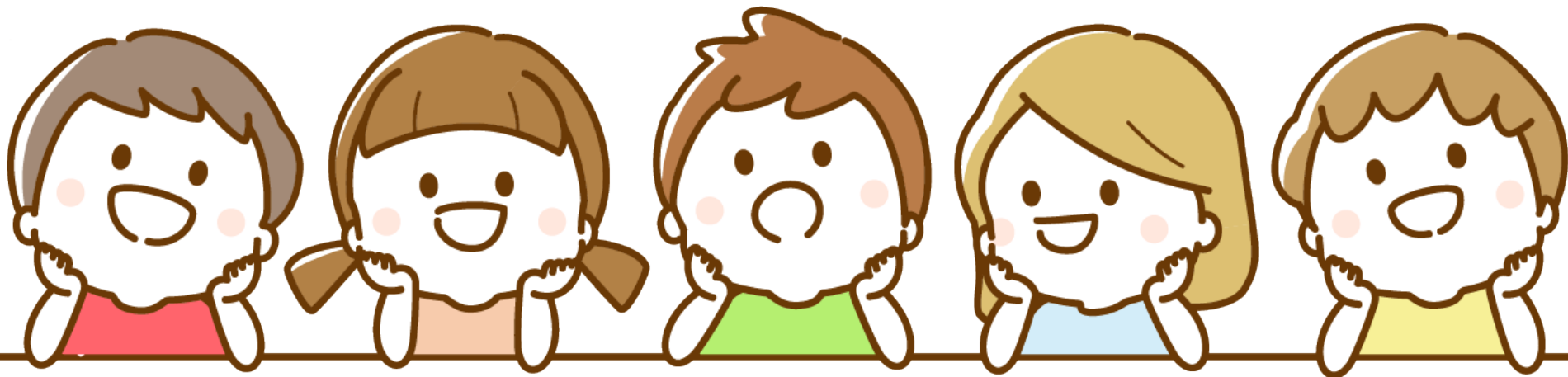


こども食堂や多世代が集う 居場所に関する報告書

〈概要版〉

令和7年3月



目次

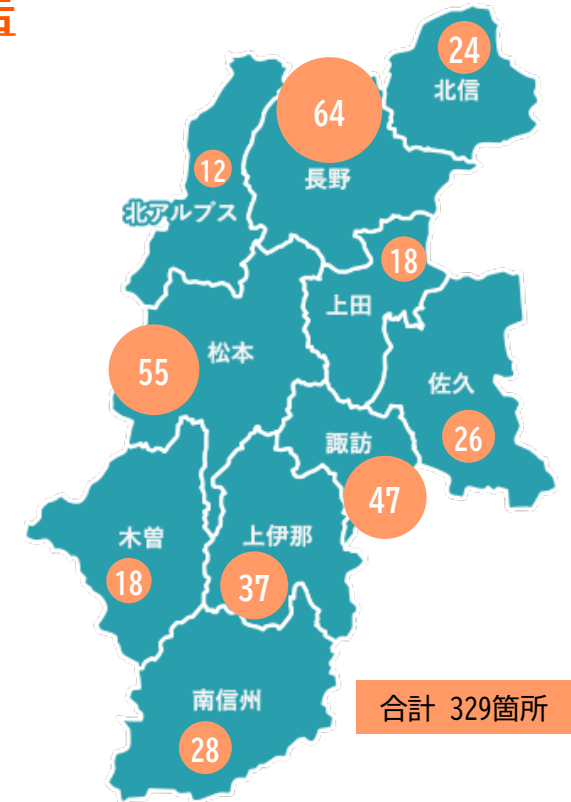
1 調査概要	p. 3
(1) 背景・目的	p. 4
(2) 調査対象者及び項目設計の考え方	p. 5
(3) 調査実施方法及び回収結果	p. 6
2 居場所の概要	p. 7
(1) 居場所の所在地・運営主体	p. 8
(2) 居場所の開催目的・活動内容	p. 9
(3) 居場所の利用者・関わっている人の状況	p. 10
3 居場所の社会的なインパクト	p. 11
(1) 子どもへの効果	p. 12
(2) 子どもの保護者への効果	p. 15
(3) 地域や協力者への効果	p. 18
4 現状と課題	p. 22
(1) 居場所の開催状況	p. 23
(2) 活動にあたっての課題	p. 24
(3) 課題①：マンパワー	p. 25
(4) 課題②：資金・物資	p. 28
5 今後に向けて	p. 33
(1) 子どもの居場所の意義	p. 34
(2) 協力者を増やすためのアイデア	p. 36
6 まとめ	p. 37

1 調査概要

(1) 背景・目的

- 現在、長野県内には約300を超えるこども食堂や多世代が集う居場所（以下「居場所」という）があり、様々な効果が生まれている。
- しかし、これら居場所は、利用者からの対価のみでは運営が困難であり、運営者への負担が大きい構造にあるため、持続可能な運営という観点において課題が残されている。
- 持続可能な運営ができる居場所を増やすためには、地域の支え合い、ボランティアによる協力、企業等からの寄付などの支援が必要であり、居場所づくりに対する理解を高め、協力を得ていくことが重要である。
- 本調査は、長野県における居場所の実態を把握するとともに、社会的なインパクトの「見える化」を行うことを目的に実施する。

県内の子どもの居場所



出典：長野県みらい基金

●調査目的

- 1：こども食堂・多世代の居場所等の実態把握
- 2：こども食堂・多世代の居場所の社会的なインパクトの「見える化」

(2) 調査対象者及び項目設計の考え方

調査は、「運営者」、「協力者（活動を支えるスタッフ）」、「活動への参加者（主に親子）」を対象に行う。
それぞれ、把握する視点は次のとおりである。

		運営者	協力者 (活動を支えるスタッフ)	活動への参加者 (主に親子)
目的1 実態把握	属性	● 基本属性等	● 基本属性等	● 基本属性等
	モチベーション	● 何を目指しているか ● なぜ続けるのか	● なぜ始めたか ● なぜ続けるのか	● 参加のきっかけ ● なぜ参加しているか
	活動内容	● どのような活動をしているか	—	● どのくらいの頻度で参加しているか ● こども食堂の当初と参加後のイメージ
	応援者・支援者	● どのような人が活動を支えているか	● どのような支援をしているか	—
	運営経費	● どのくらい経費がかかっているか ● どのように調達しているか	● どのくらいのマンパワーを投入しているか	—
	運営課題	● どのようなことに課題を抱えているか、足りないもの	—	—
目的2 社会的なインパクト		● 気がかりな世帯に気づく ● 参加する親子に感じている変化 ● 支える協力者に感じている変化 ● 実施する地域に生じている変化	● 協力して良かったこと	● 参加して良かったことや変わったこと

(3) 調査実施方法および回収結果

	運営者	協力者	保護者	子ども
調査実施 期間	① 令和6年9月10日～10月1日 ※長野県こども若者局次世代サポート課実施 ② 令和6年11月20日～ 令和7年2月7日	令和6年11月20日～令和7年2月7日		
調査対象者	① 信州こどもカフェの運営者 ② ①以外のこども食堂や多世代 の居場所の運営者	信州こどもカフェ を含むこども食堂 や多世代の居場所 の協力者	信州こどもカフェ を含むこども食堂 や多世代の居場所 を利用する子ども の保護者	信州こどもカフェ を含むこども食堂 や多世代の居場所 を利用する子ども
調査方法	①webフォームによる回答 ②webフォームまたは 紙の調査票による回答	webフォームによる回答または紙の調査票による回答		
回収件数	139件（① 59件、②80件） ※1つの居場所から重複して回答があった場合、 基本的に①を優先しつつ、最新の情報が記入さ れている場合などは②の結果を採用した	151件	124件	122件

- ・ 報告書のパーセント数字は小数点第2位を四捨五入しているため、合計が100%にならない場合や文中に示す数値とグラフの数値が一致しない場合がある。
- ・ 図表内のnは該当する設問の回答者数を表す。無回答を除いて集計しているため、設問ごとに回答者数が異なる。
- ・ 1人の回答者が2つ以上の回答をすることができる複数回答の設問では、回答数の合計を回答者数（n）で割った比率を示しており、比率の合計は100%を超える。

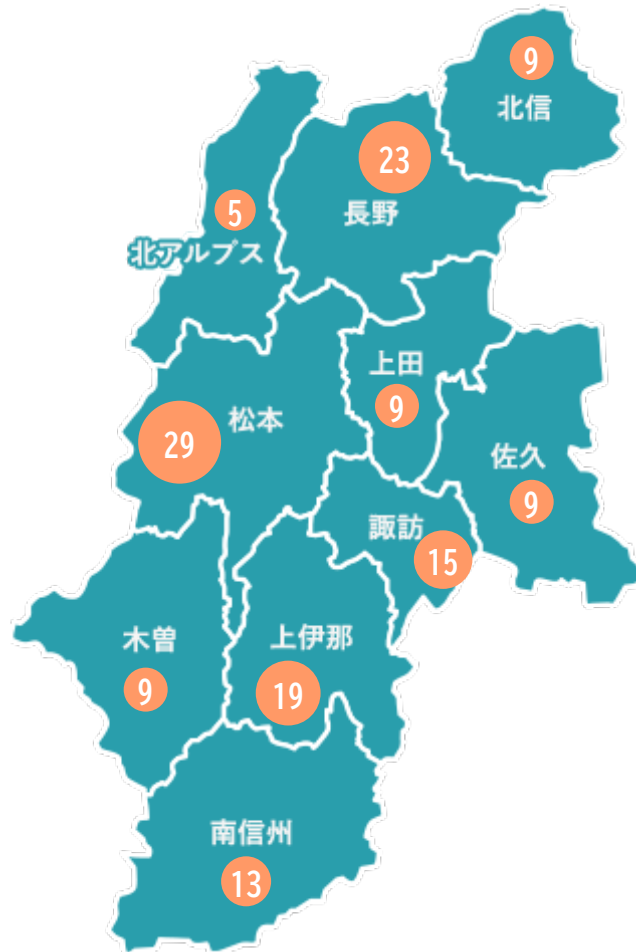
2 居場所の概要

2 居場所の概要

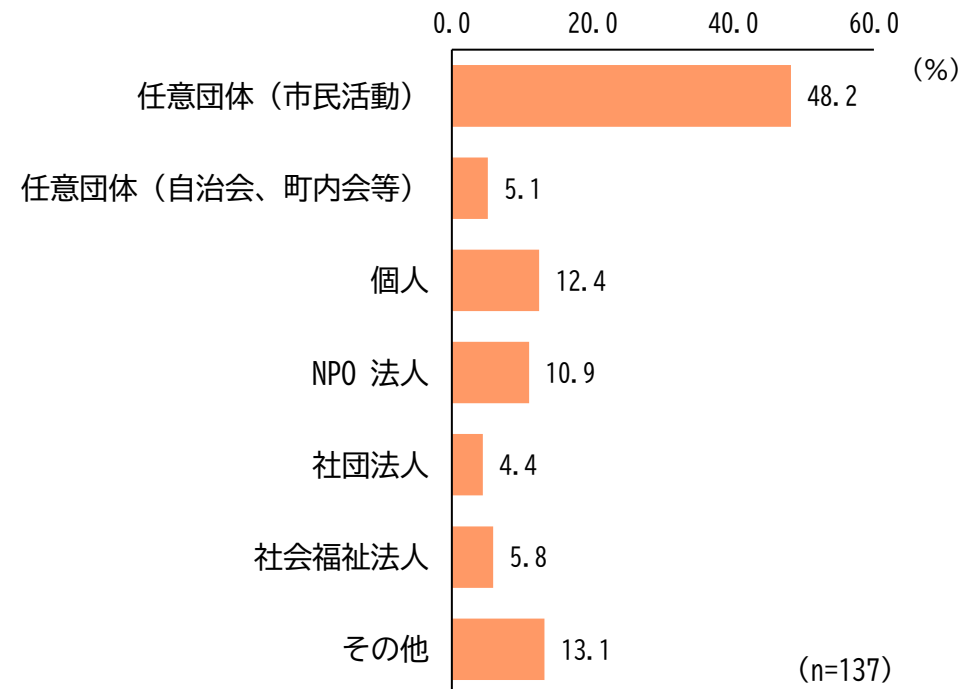
(1) 居場所の所在地・運営主体

- 運営者調査に回答があった居場所は、松本地域が29件で最も多く、次いで長野地域が23件、上伊那地域が19件となっている。県内77市町村のうち、44市町村に分布している。
- 運営主体は「任意団体（市民活動）」の割合が48.2%と半数近くを占めている。

図表1 所在地



図表2 運営主体

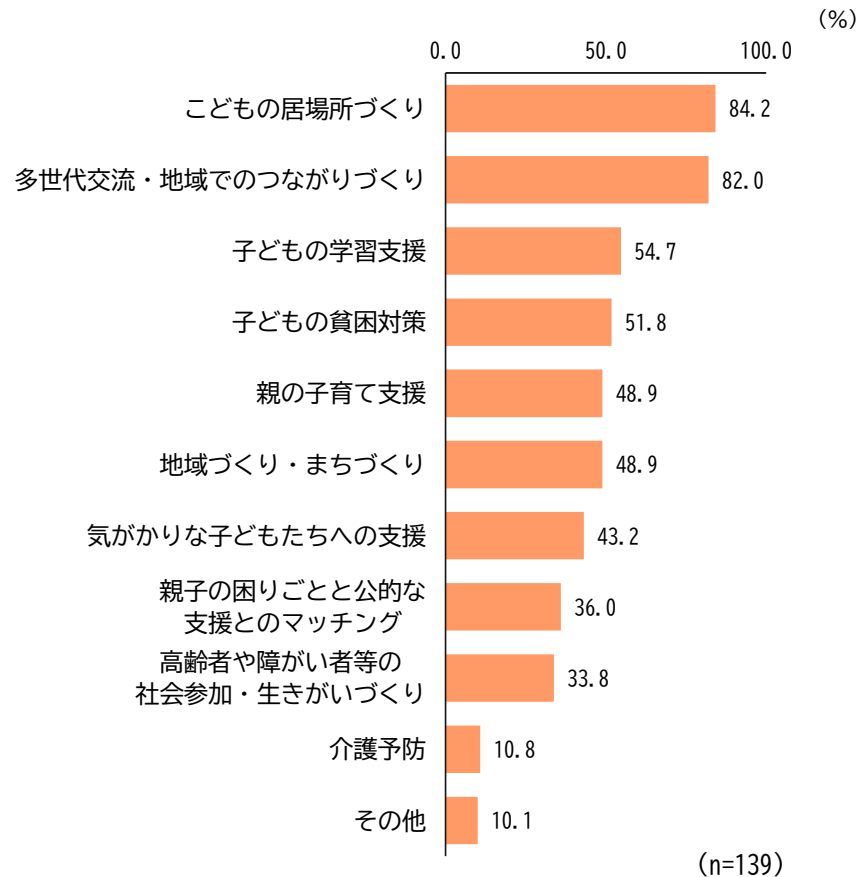


2 居場所の概要

(2) 居場所の開催目的・活動内容

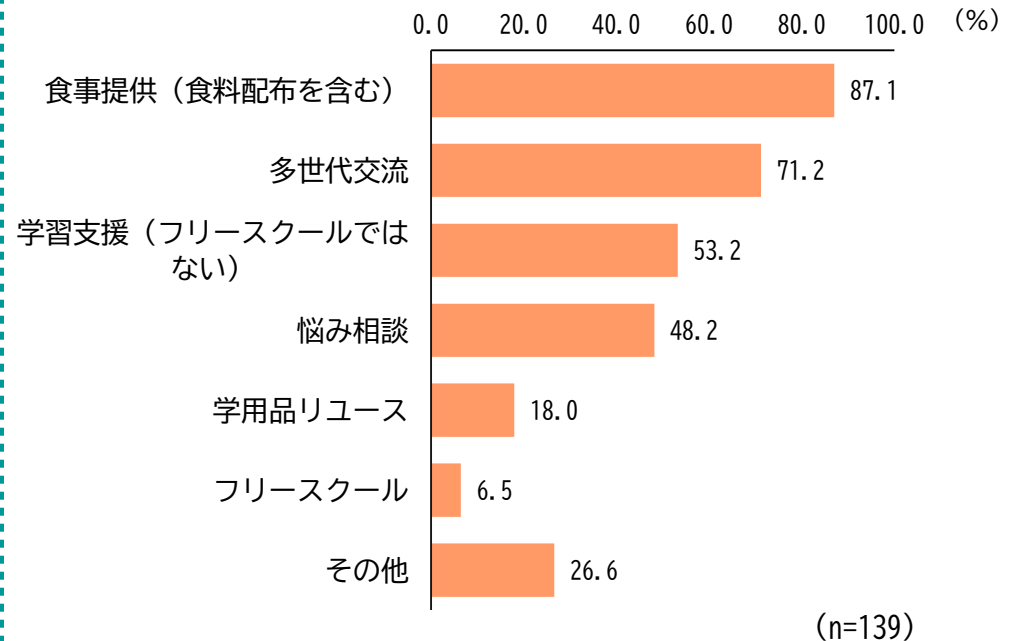
■ 主な目的は、「こどもの居場所づくり」が84.2%、「多世代交流・地域でのつながりづくり」が82.0%と8割を超えており、次いで「子どもの学習支援」が54.7%、「子どもの貧困対策」が51.8%、「親の子育て支援」「地域づくり・まちづくり」が48.9%である。

図表3 居場所を開催する主な目的[複数回答]



■ 活動内容は、「食事提供（食料配布を含む）」の割合が87.1%で最も高く、次いで「多世代交流」が71.2%、「学習支援（フリースクールではない）」が53.2%、「悩み相談」が48.2%である。

図表4 活動内容[複数回答]



2 居場所の概要

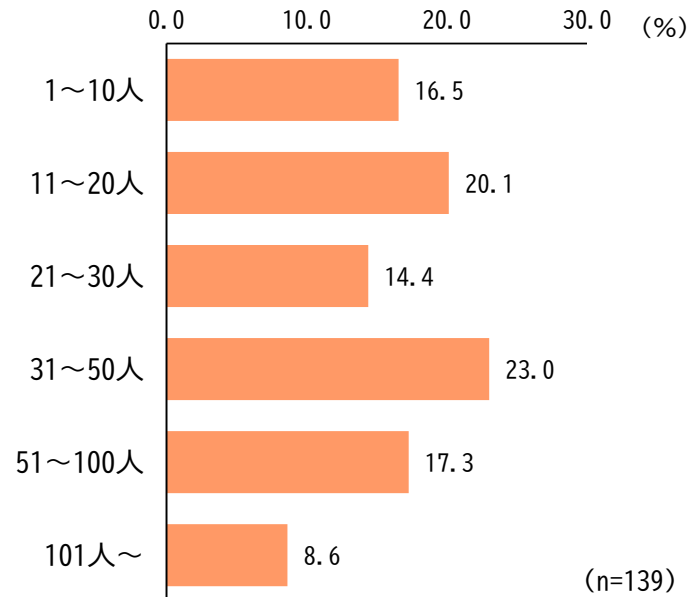
(3) 居場所の利用者・関わっている人の状況

- 開催1回あたりに集まる概ねの利用者数の平均値は44.7人で、会食に限定した場合は29.2人、学習支援に限定した場合は5.5人である。
- 概ねの利用者数では、「31～50人」の割合が23.0%で最も高く、次いで「11～20人」が20.1%となっている。

図表5 利用者数の平均値

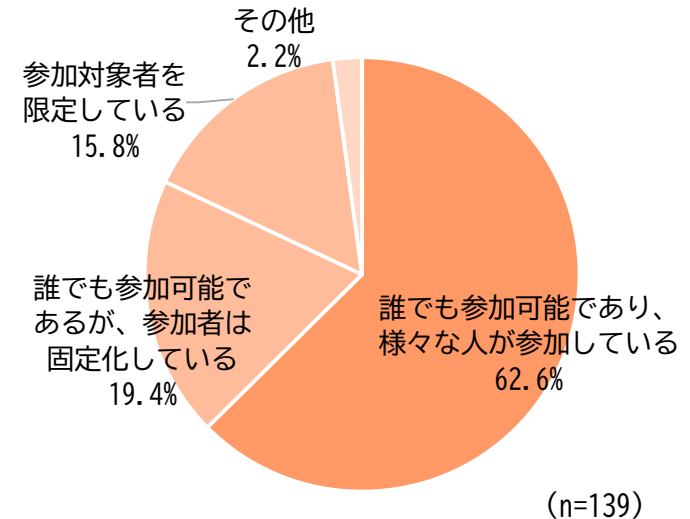
1回あたりに集まる概ねの利用者数	44.7人
会食に限定した場合の、 1回あたりに集まる概ねの利用者数	29.2人
学習支援に限定した場合の、 1回あたりに集まる概ねの利用者数	5.5人

図表6 1回あたりに集まる概ねの利用者数



- 参加への条件は、設けていない居場所が82.0%、設けている居場所が15.8%となっている。
- 利用者、ボランティア、運営者などとして関わりがある実人数の平均値は、「中学生未満」が26.2人、「高校生・大学生など15～19歳の若者」が6.4人、「20～50歳代」が15.3人、「シニア層」が12.0人である。
- 協力企業数の平均値は、1.9社である。

図表7 参加条件の設定状況



図表8 関わりがある実人数・協力企業数の平均値

中学生未満	26.2人
高校生・大学生など15～19歳の若者	6.4人
20～50歳代	15.3人
シニア層（おおよそ60歳以上）	12.0人
協力企業数	1.9社

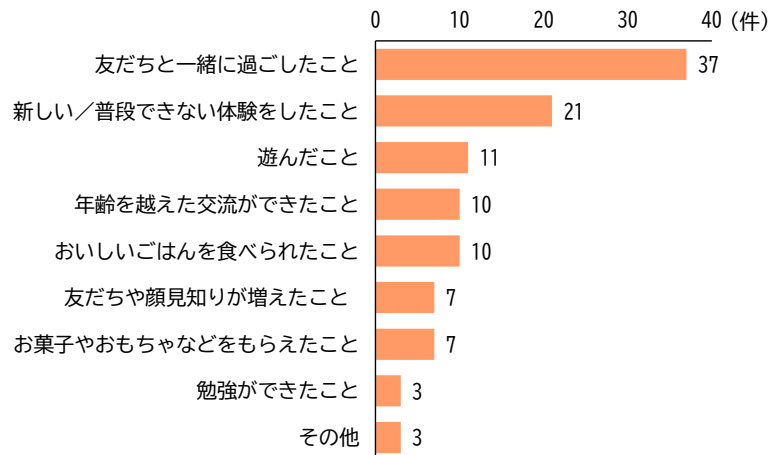
3 居場所の社会的なインパクト

3 居場所の社会的なインパクト

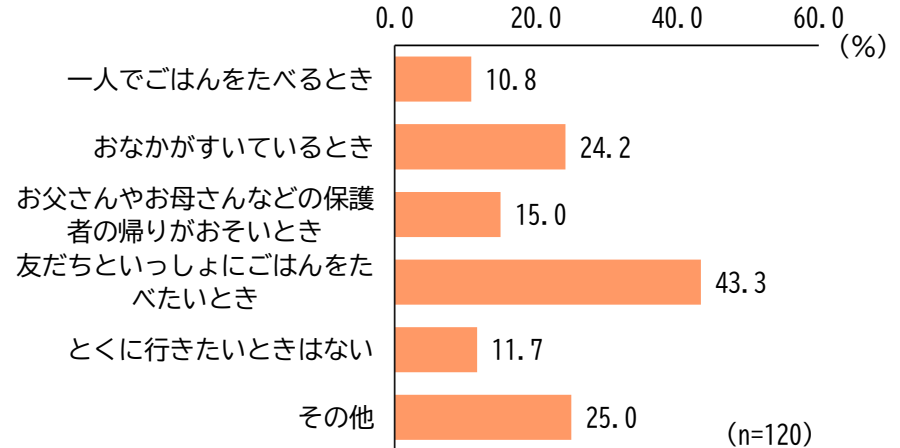
(1) 子どもへの効果

- 居場所で経験した楽しかったことでは、「友だちと一緒に過ごしたこと」との回答が37件で最も多かった。
- 子どもがどんなときに居場所に行きたいかについては、「友だちといっしょにごはんを食べたいとき」の割合が43.3%で最も高い。

図表9 居場所で経験した楽しかったこと[自由記述]



図表10 どんなときに居場所に行きたいか[複数回答]



友だちと一緒に過ごした

みんなでいっしょに遊んだりご飯を食べるのがたのしかった（小学校低学年）

友達とゆっくりできて、話したり遊べたり安心できた（中学生）

友達と楽しめる居場所でも楽しかった（高校生）

新しい／普段できない体験

お料理するのが楽しい（小学校低学年）

自分でついたおもちを食べられたこと（小学校高学年）

たき火をあまりしなかったからできて楽しかった（小学校高学年）

年齢を越えた交流

大人の人々と遊べる（小学校低学年）

大学生とあそぶこと（小学校低学年）

大人と話ができるようになった（小学校高学年）

おいしいごはんを食べられた

美味しいごはんをママと一緒に食べられて嬉しかった（小学校低学年）

いろんな食べ物が食べれてうれしかった（小学校低学年）

お腹いっぱいになってとても楽しく満足した（中学生）

3 居場所の社会的なインパクト

- 子ども自身が、居場所による自分自身への効果として最も感じているのは「さまざまな体験をした」で、約6割となっている。
- 協力者と保護者においても、8割近くの人が「様々な体験の場になっている」と感じており、次いで「表情が明るくなり、笑顔が増えた」との効果が感じられている。

図表11 協力者調査・保護者調査・子ども調査：子どもへの効果[複数回答]

子ども調査の選択肢	保護者調査・協力者調査の選択肢	子ども調査	保護者調査	協力者調査
まわりの人にやさしくなった	思いやりが生まれている	35.2%	41.9%	55.6%
笑うことがふえた	表情が明るくなり、笑顔が増えた	48.4%	62.9%	74.2%
あいさつができるようになった	社会性が身についている	40.2%	53.2%	64.9%
きれいな食べ物が増えた	食生活の改善につながっている	32.0%	45.2%	51.7%
さまざまな体験をした	様々な体験の場になっている	58.2%	77.4%	77.5%
お父さん、お母さん以外で、たよれる大人がふえた	親以外に頼れる大人が増えた	39.3%	50.0%	62.3%
いろいろな人とお話することがふえた	他者とのコミュニケーションが向上した	51.6%	54.8%	63.6%
自分からなにかしてみたいと思うことがふえた	子どもの自主性が育まれている	33.6%	44.4%	61.6%
自分がすきになった	子どもの自己肯定感が高まっている	27.9%	42.7%	51.7%
勉強などのやる気がました	学びや就労など社会生活への意欲が向上した	27.9%	28.2%	46.4%
将来への希望がもてた	将来への希望が持てている	23.8%	34.7%	41.7%
回答者数		122	124	151

【自由記述に見られたエピソード (●=保護者調査より / ●=協力者調査より)】※一部抜粋

様々な体験の場になっている

流しそうめん、おもちつきなど、家庭ではなかなかできない体験ができて喜んでいました！

行事食、伝統食等を味わう機会になっている。嫌いな食べ物も少しずつ食べれるようになってきている

社会性が身についている

子ども同士でトラブルがあった時「絶対あやまらない」と言っていた子が謝ることができた

他者とのコミュニケーションが向上した

一人っ子の息子が大勢でワイワイ食事することに喜びを感じていて、素晴らしい居場所ができた実感している。

学校は違えど子供食堂で会える友達がいる、その子たちの話を家でもする。自分から大人たちに関わろうとする気持ちが増えてることが感じられる

学校だけでない友達ができているように感じる

自分は1人だと自己完結する事なく、様々な居場所や人間がいる事で、自分は1人じゃないと感じられる部分があると思う。

親以外に頼れる大人が増えた

親に言いづらいことも、スタッフの方に聞いてもらうことができるようです。

子どもの自主性が育まれている

子どもから進んで何かしたいと話しかけてくれた事がとても小さな変化とは思いますが嬉しかった

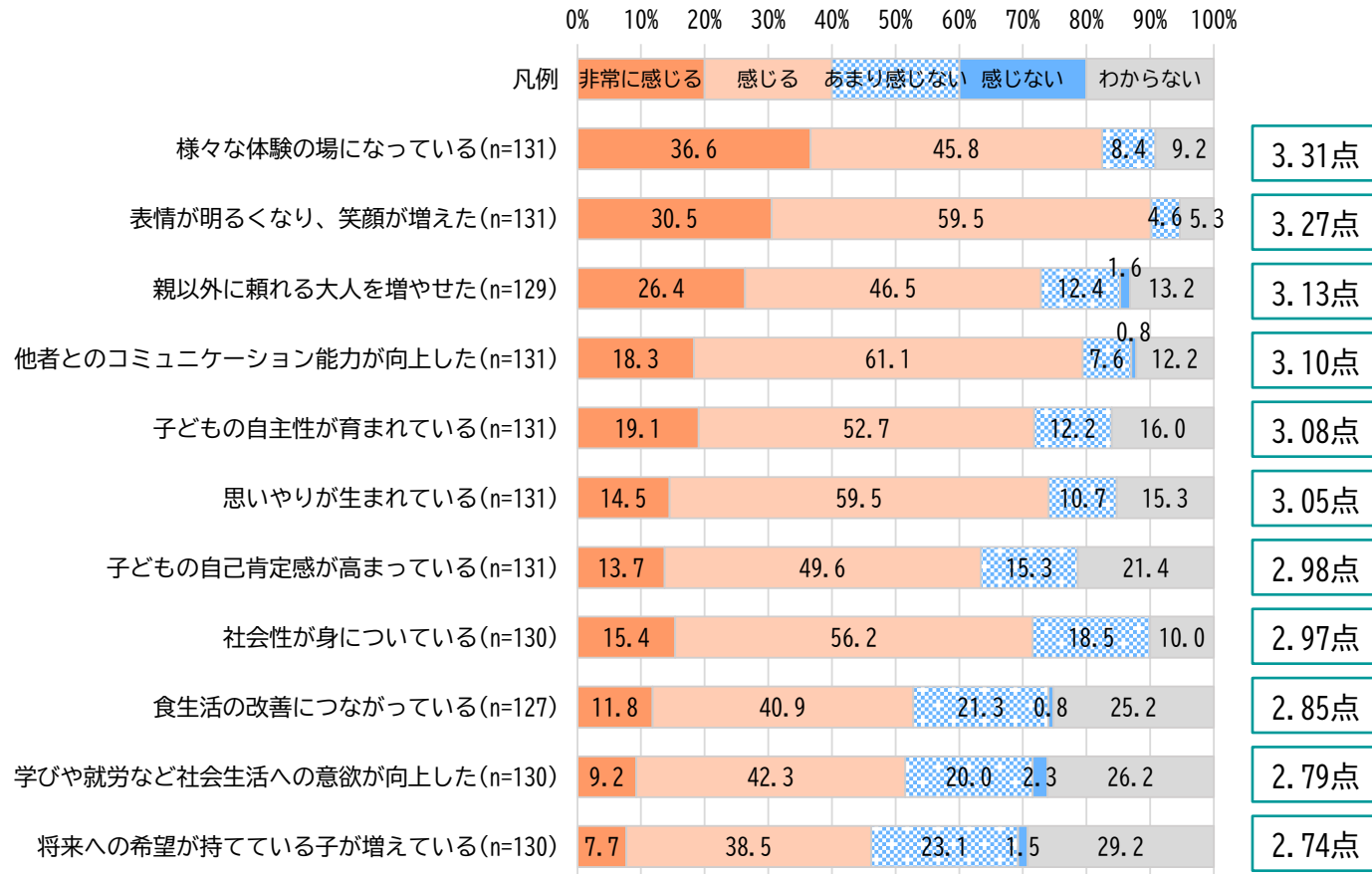
その他の効果

不登校からの復帰

3 居場所の社会的なインパクト

- 運営者が居場所による子どもへの効果として感じているのは、「表情が明るくなり、笑顔が増えた」「様々な体験の場になっている」といったものである。全11項目中7項目で、「非常に感じる」と「感じる」の合計が6割を超えている。

図表12 運営者調査：子どもへの効果



※「非常に感じる」= 4点、「感じる」= 3点、「あまり感じない」= 2点、「感じない」= 1点として得点化した。「わからない」は母数から除いている。

本来のその子らしさを発揮できるように、生き生きしている子が多いです。

コロナで元気がなかったこども達の笑顔が増えました。

スタッフ・ボランティアと信頼関係が出来、笑顔が絶えません。勉強も成績が向上。彼らの自信に繋がっています。

子どもたちが自発的に参加するようになった。 1)食事の準備、配膳、手伝い 2)イベントへの提案、提言 3)イベント開催時の進行 4)あいさつが増えた。

子どもたちがイベントを、企画から実施まで担当した際に、終了後、子どもたちが達成感に溢れた様子でした。また、その後、その経験が自信となり、自主性が育った様子でした。

学年が違って、話したり、一緒にご飯を食べたりする姿が見られて、新たな交流や繋がりが見られます。ひとりで参加した子をほっとかないで、中学生が声をかけたりして、思いやりの心が育っているように感じます。

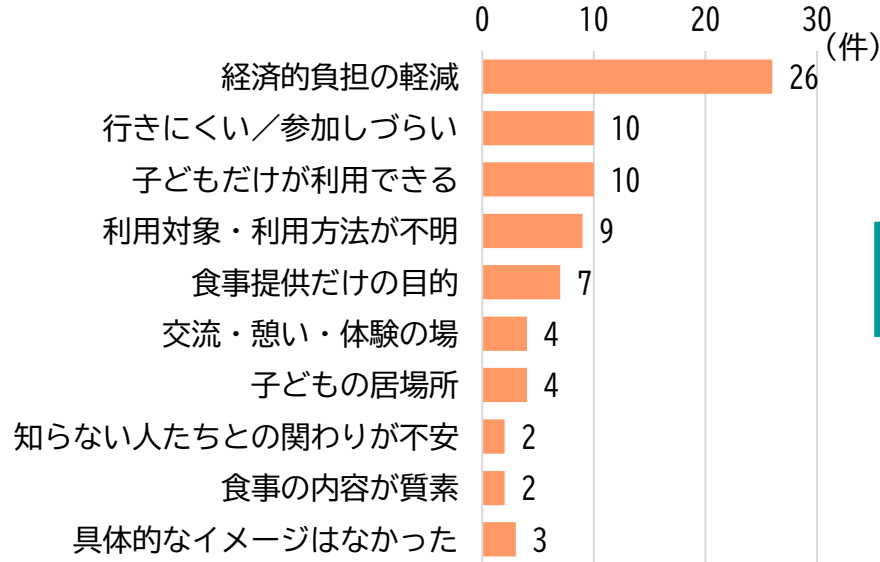
学校や放課後デイサービスでも居場所のなかった子どもが、徐々に人と一緒にできることが増えた。暴言や拒否を受け入れて、何ができるかを一緒に考えてくれるスタッフと過ごす中での変化があった。

3 居場所の社会的なインパクト

(2) 子どもの保護者への効果

- 保護者が居場所に対して当初もっていたイメージは、「経済的負担を軽減するための場所」「行きにくい／参加しづらい」「子どもだけが利用できる」といった内容が多かった。
- 実際に行ってみてのイメージは、「交流の場」「誰でも気軽に利用していい」「あたたかい雰囲気のある場所」といった内容が多くなっている。

図表13 居場所に対して当初もっていたイメージ[自由記述]



生活に本当に困っての利用でないと行ってはいけなところだと思っていました

本当に自由に参加していいのかな

行ってみたかったけど、勇気がなかった

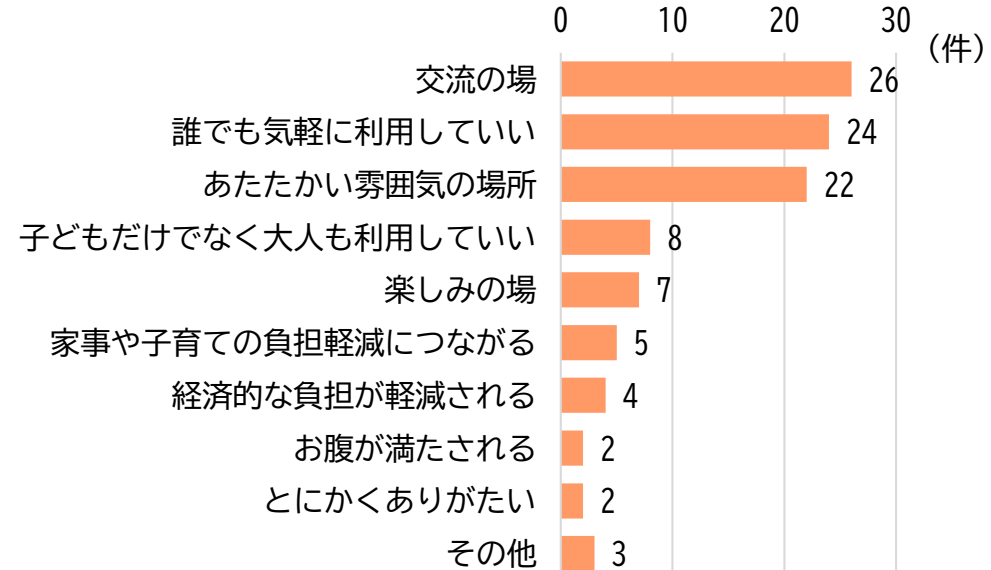
子供だけしか利用できないのかと思った

ご飯を食べるだけの場所

孤独なイメージ

知らない人達との関わり合いが不安だった

図表14 実際に行ってみてのイメージ[自由記述]



コミュニケーションの場所

子供が騒いでいても気にならない空間

子育て世代の親同士の交流や癒しの場

誰でも参加できる場所

地域の人ボランティアも多く、誰でも気軽に受け入れてくれる場所

とてもアットホームで温かい居場所

親も子も利用していいんだと思った

3 居場所の社会的なインパクト

- 保護者自身は、「楽しい時間を過ごせている」「ほっとできる場所になっている」といった効果を感じている。
- 協力者が保護者への効果として最も感じているのは「ほっとできる場所になっている」である。

図表15 保護者調査・協力者調査：保護者への効果[複数回答]

選択肢	保護者調査	協力者調査
地域の中に顔見知りが増えた	55.6%	-
悩みを気軽に相談できる場所になっている	30.6%	60.3%
楽しい時間を過ごせている	79.0%	-
ほっとできる場所になっている	69.4%	74.2%
元気になった、穏やかになった、笑顔が増えた	66.9%	58.3%
お子さんとの関係が良くなった	55.6%	-
家事・子育ての負担が軽くなった	66.9%	56.3%
お子さんと離れて自分の時間ができた	33.9%	-
食生活の改善につながっている	53.2%	-
経済的な負担が軽くなった	54.0%	41.1%
回答者数	124	151

【自由記述に見られたエピソード (●=保護者調査より / ●=協力者調査より)】※一部抜粋

元気になった、穏やかになった、笑顔が増えた／
悩みを気軽に相談できる場所になっている

おだやかな気持ちがふえた。

子育てに悩んでいるのが自分だけでないと分かった。

お母さんが、子育ての悩みを吐露する場で、肩の荷をすこしでもおろすことで、子どもに笑顔で向き合おうとする姿が、見えるようになり、月1回の子ども食堂を楽しみに、参加してもらい、お母さんの柔らかな表情の中で、子どもも、楽しげに参加している様にみえます。

家事・子育ての負担が軽くなった／
食生活の改善につながっている

家事の負担が減りました。

食事を頼んでいる日は家事が減り、他のことに時間を当てられるので気持ちが楽です。メニューもこだわっているので普段の料理の参考にもなります。

子供がまた行こうね！楽しかった！と言って家にいる時よりしっかり食べてくれるし私も家事の負担が少し減りました。

楽しい時間を過ごせている

他の学校のお母さんとの交流が増えて嬉しいです。

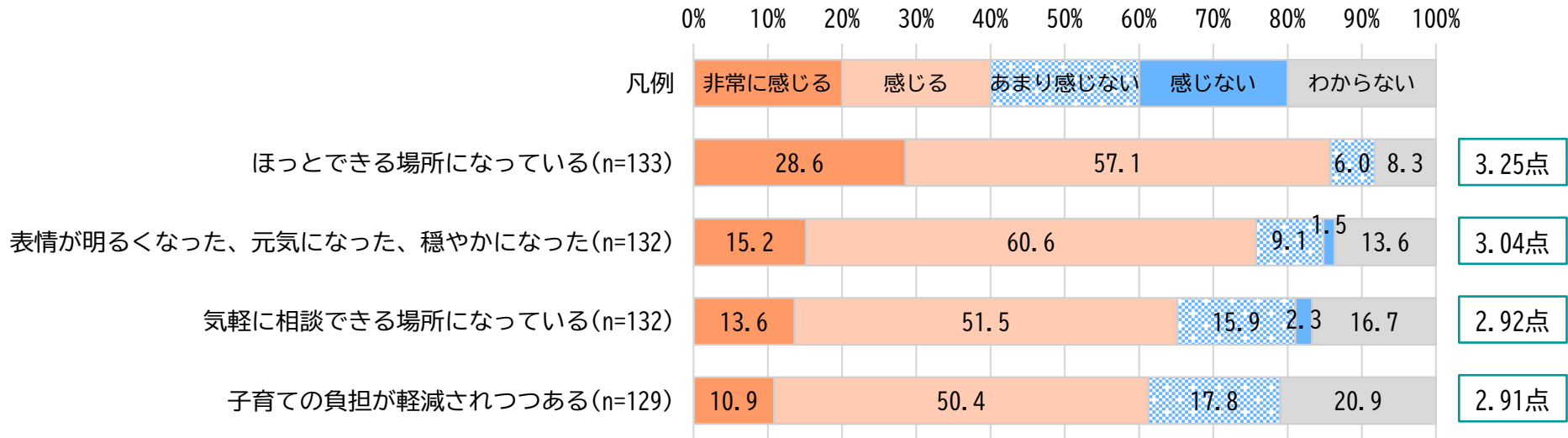
お子さんとの関係が良くなった

ママが、子どもは出来るんだということに気づいてくれた。出来ないと思っていた。

3 居場所の社会的なインパクト

- 運営者が居場所による保護者への効果として感じているのは、「ほっとできる場所になっている」などである。4項目全てで、「非常に感じる」と「感じる」の合計が6割を超えている。

図表16 運営者調査：保護者への効果



※「非常に感じる」＝4点、「感じる」＝3点、「あまり感じない」＝2点、「感じない」＝1点として得点化した。「わからない」は母数から除いている。

首都圏などから移住し、親が遠くに居て頼ることができない子育て世代の方々の拠り所となれている実感があります。

安心して過ごせる居場所があることによって孤立をふせぎ、心の安定を得ることができていると思います。

心のより所になっている

参加者だった親が、ボランティアとして支える側になっている。

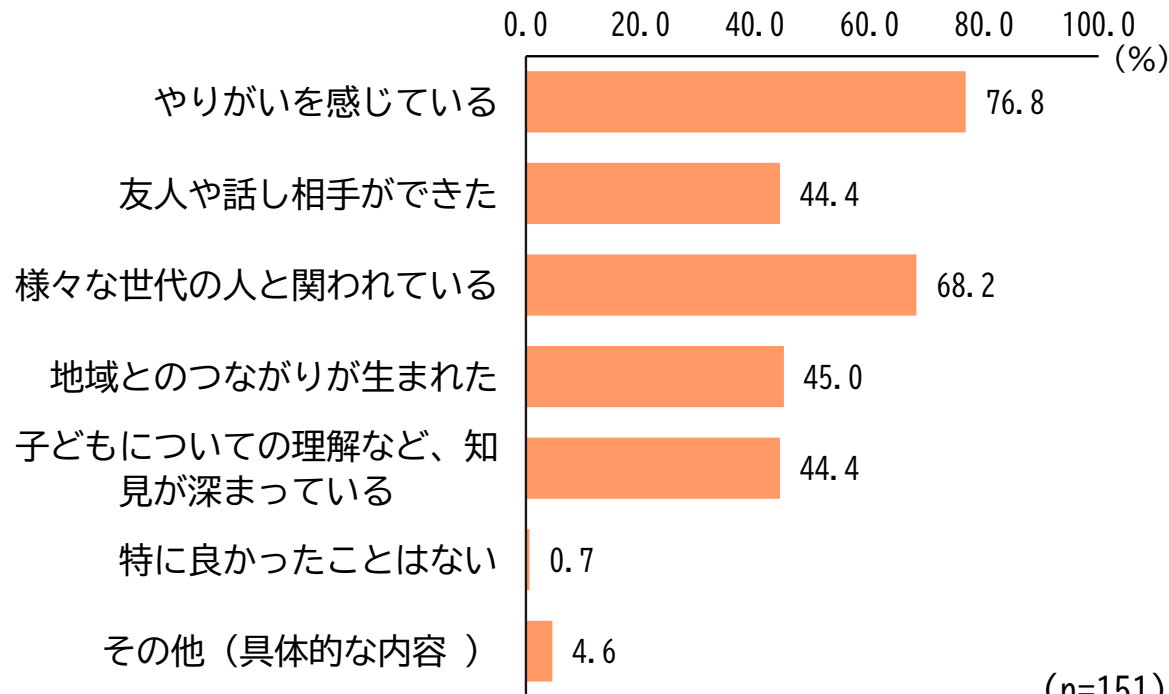
参加者から、子育てが一段落したら是非お手伝いに来たい、高校生になったら子ども食堂に来て子どもたちと遊びたい、と言ってくれる参加者が出て来ている。

3 居場所の社会的なインパクト

(3) 地域や協力者への効果

- 協力者が活動を通して得られたこととしては、「やりがいを感じている」の割合が76.8%で最も高く、次いで「様々な世代の人と関わっている」が68.2%である。

図表17 協力者調査：活動を通して得られたこと[複数回答]



(n=151)

こども食堂を始めて、大変なこともあります。が、やりがいを感じています。これからも私たちが楽しみながら運営していきたいです。

子供だけではなく子供達から元気をも
らいたい高齢者もいるので、その橋渡
しもできたら素晴らしいと思います

友人が始めた事をきっかけに、自分も
自分の地域で動きはじめた。地域のみ
んなで地域の子どもたちを見守りたい。

3 居場所の社会的なインパクト

- 協力者が、居場所による地域における効果として最も感じているのは「食材などの寄付が増えている」である。
- 保護者が、居場所による地域における効果として最も感じているのは「地域住民の結びつきが強まっている」である。

図表18 保護者調査・協力者調査：地域における効果[複数回答]

選択肢	協力者調査	保護者調査
気がかりな世帯に気づき、必要な支援につなげる場にもなっている	51.0%	62.1%
高齢者の生きがいづくりにつながっている	53.6%	54.0%
地域住民の結びつきが強まっている	64.2%	64.5%
食材などの寄付が増えている	69.5%	-
協力する企業が増えている	52.3%	-
回答者数	151	124

※「気がかりな世帯に気づき、必要な支援につなげる場にもなっている」の選択肢は、保護者調査においては「困難を抱える家族を見守る体制が地域に生まれている」

【自由記述に見られたエピソード（○＝協力者調査より / ●＝保護者調査より）】※一部抜粋

世代を越えた交流が生まれている

普段は、関われないような、いろいろな世代と関われる。

ボランティアの学生さんたちは小さな子供と触れ合う機会が少ないようで、よく可愛がっていただいています。子供も学生さんと触れ合う機会が少ないのでお互いに良い刺激になっているのではないのでしょうか。いつも優しく接していただいて有難い限りです。

利用者の看護学生さんから、息子や娘を可愛がってもらい嬉しく思っています。看護学生さん達が通っている看護学校のオープンキャンパスや、スーパーで見かけたときにも声をかけてもらって顔を覚えてくれたことに感謝です。

ボランティアのやりがいや自信につながっている

高校生たちが子ども食堂を手伝ってくれるが、調理を通して自信を持てるようになり、自立心が芽生えているのを感じる。

支援の循環が生まれている

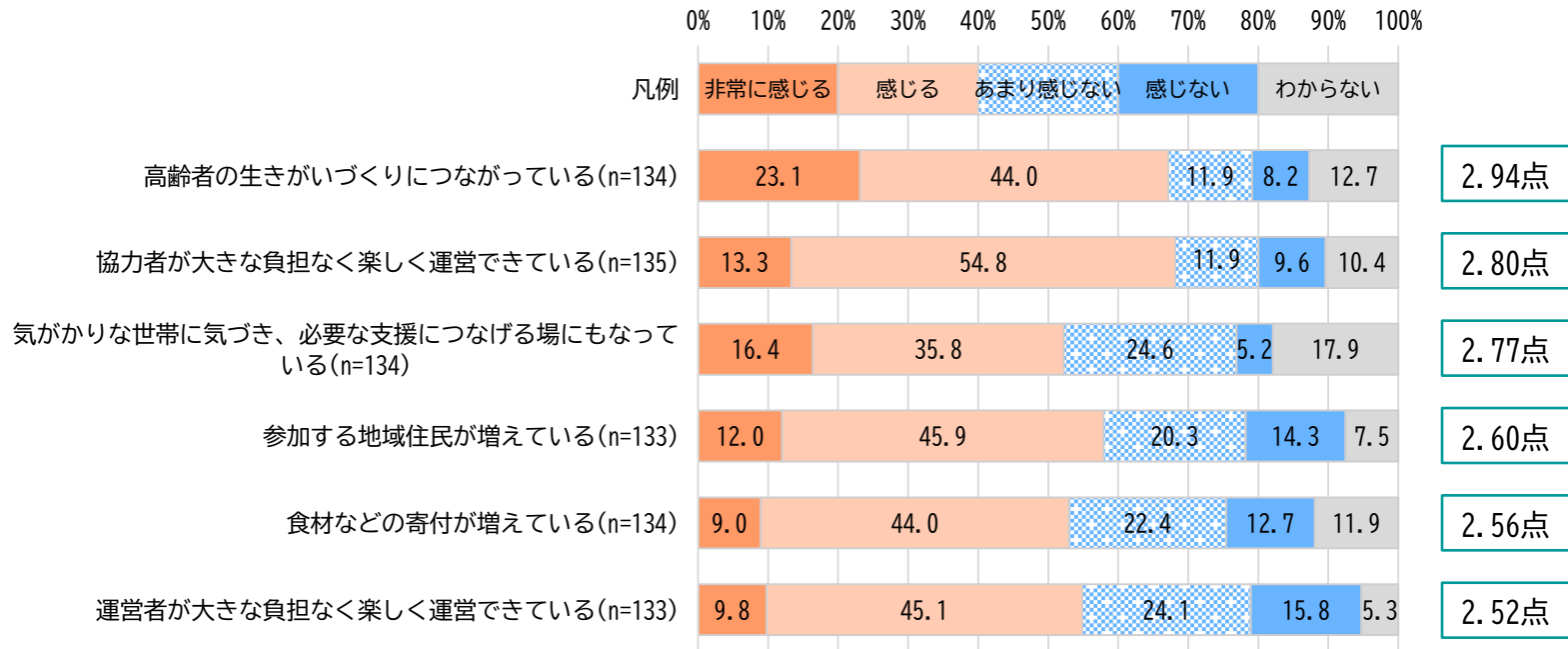
来てくれていた子が手伝い側に回って活動している姿。

地元の通信制高校や信州大学医学部看護学科の女子学生が、子ども食堂の紙芝居上演にボランティアで協力参加する人数が増えている。

3 居場所の社会的なインパクト

- 運営者が居場所による地域や協力者への効果として感じているのは、「高齢者の生きがいづくりになっている」「協力者が大きな負担なく楽しく運営できている」などである。

図表19 運営者調査：地域における効果



異年齢の交流がもてて良い。地域の方も交えて行った縄ないは、**地域の方向土の交流**にもなり良かった。

住民が個人的に打ち込んでいる**趣味を巡って人々の交流**が始まり、その趣味の同好会・サークルなどがいくつか生まれた。

最初にスタートした時のメンバーの一人が癌で闘病生活を送ったときもお弁当を届けたり、病院の送迎をしたり、**みんなで支えることができた**。地域とのつながりが薄い**移住者の高齢者同士の助け合いの拠点**にもなっています。

高齢者、特に**1人老人の方々が、小さい子供達と話ができたり、昔の遊びをしったり生きがいになっている**為、楽しみにしている。

障がいをお持ちの方も役割を感じボランティアを楽しみにしてくれている。

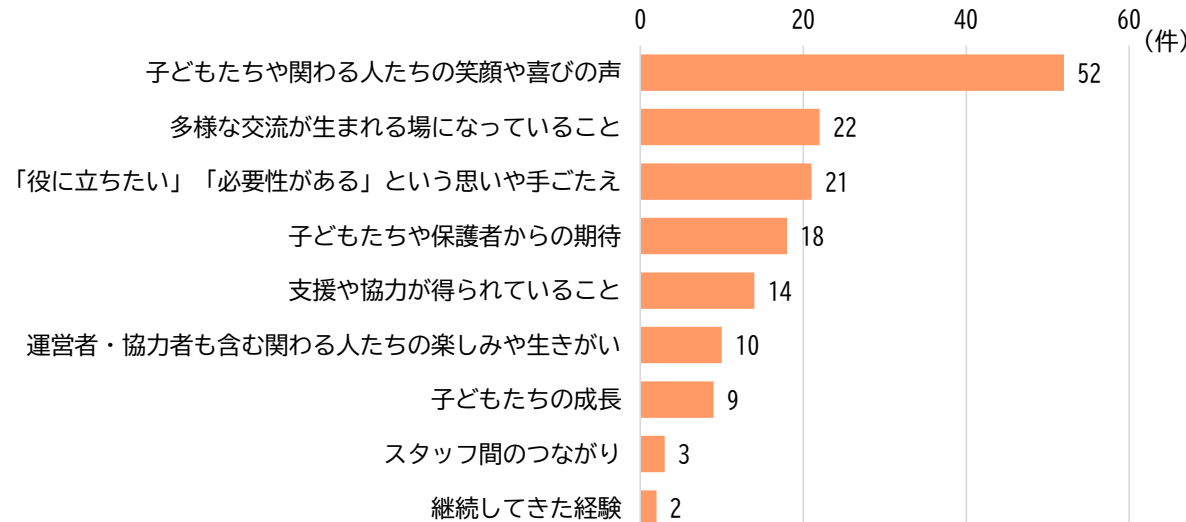
ボランティアの高校生や大学生の成長が著しい点です。以前、集団不適應だった小学生が、ボランティア活動に参加してから高校生や大学生になって**将来の進路を真剣に考えるようになった**こと。また、卒業後、教員や県職員になって、教育や福祉の分野の仕事に就けた等の成果が数多く上がってきました。さらに、子ども食堂に参加していた**中学3年間不登校だった女子生徒が、公立大学の教育学部に進学し、参加している不登校児童の研究を深め、いじめや不登校等の解決のために大学院に進学したいという希望から、受験したところ2024年4月に公立大学大学院に合格できた**こと。

3 居場所の社会的なインパクト

(4) 運営者のモチベーション

- 運営者のモチベーションは、「子どもたちや関わる人たちの笑顔や喜びの声」との回答が最も多く、次いで「多様な交流が生まれる場になっていること」「『役に立ちたい』『必要性がある』という思いや手ごたえ」となっている。

図表20 運営者調査：活動が続けるうえでのモチベーション[自由記述]



笑顔・喜びの声

こども達の笑顔

子ども達の喜んでくれる姿

参加する子どもの笑顔。
幼児の保護者からの感謝のコトバ

子どもやボランティアの笑顔

一人暮らしのお年寄りが子どもを
見て笑顔になっている姿

関わる関係者が楽しそうに活動を
してくれていること

子どもたちの期待

子どもたちや保護者が居場所
として開催を楽しみにし
てくれている姿

子ども達から「今度いつ？」と
聞かれる事で次回も頑張ろう！
と思っています

支援や協力者の存在

活動を継続していくための助成
金・寄付・賛同の声

知らない人から食料品やお金の寄付が届
く度に、気持ちを託された気持ちになる

多様な交流

地域の支援の輪

世代を越えて一緒に
ごはんを食べるのが
美味しく、楽しい

人々の関わりを生み温かな
つながりの輪が進展するこ
とによろこびを感じる

多世代、特に高齢者が子供た
ちとの交流に生きがいを感じ
ていると話してもらう時

「役に立ちたい」「必要性がある」

「子どもから大人まで、一人ひと
りが愛される存在！」という信念

不安と混乱した社会にあって、将
来を担うこどもたちを健やかに成
長させたいという強い使命と責任

より良い、住みやすい地域に
していきたいという情熱のみ

「地域の子どもは地域で育て
る！」をモットーに

どのような境遇におかれた子ども
も、一人ひとりがその子らしく夢
と希望をもって生活してほしい

4 現状と課題

4 現状と課題

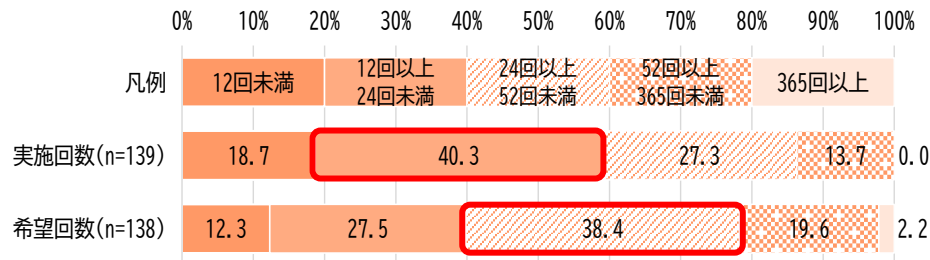
(1) 居場所の開催状況

- 1年あたりの実施回数の平均値は34.1回、本来1年あたりに実施したい回数（希望回数）の平均値は53.5回で、その差は19.4回である。
- 実施回数では「12回以上24回未満」（月に1・2回）の割合が40.3%で最も高い。
- 希望回数では「24回以上52回未満」（2週に1回～週に1回）の割合が38.4%で最も高い。

図表21 1年あたりの実施回数および
本来1年あたりに実施したい回数（希望回数）の平均値

実施回数	34.1回
希望回数	53.5回
希望回数－実施回数	19.4回

図表22 1年あたりの実施回数および
本来1年あたりに実施したい回数（希望回数）

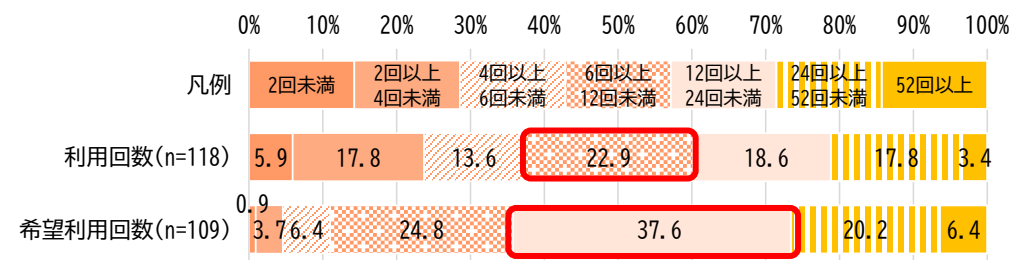


- 保護者への調査によると、1年あたりの利用回数の平均値は15.3回、希望回数の平均値は20.1回で、その差は4.8回である。
- 利用回数では「6回以上12回未満」（1・2ヶ月に1回）の割合が22.9%で最も高い。
- 希望回数では「12回以上24回未満」（月に1・2回）の割合が37.6%で最も高い。

図表23 1年あたりの利用回数および
本来1年あたりに利用したい回数（希望回数）の平均値

利用回数	15.3回
希望回数	20.1回
希望回数－利用回数	4.8回

図表24 1年あたりの利用回数および
本来1年あたりに利用したい回数（希望回数）



運営者はもっと実施する必要があると考えており、利用者ももっと利用したいと考えている

運営の課題となっていることは何か

4 現状と課題

(2) 活動にあたっての課題

- 活動にあたっての課題のうち、マンパワーに関わるものとしては「運営者など、特定の人にかかる負担が大きい」(46.8%)や「ボランティアが不足している」(41.7%)となっており、4～5割の居場所がマンパワーの不足を感じている。
- 資金や物資に関わるものでは、「食材費の負担が大きい」(43.2%)、「運営資金が不足している」(30.9%)などが挙げられている。

図表25 活動にあたっての課題 [複数回答]

	人数	割合 (%)	マンパワー	資金・物資	それ以外
運営者など、特定の人にかかる負担が大きい	65	46.8	●		
食材費の負担が大きい	60	43.2		●	
ボランティアが不足している	58	41.7	●		
学校や行政、地域組織等の他組織との連携	45	32.4			●
運営資金が不足している	43	30.9		●	
生活困窮家庭など、本当に支援をしている人の把握ができない	43	30.9			●
助成金の見通しが不安である	41	29.5		●	
支援したい子どもの把握ができない	32	23.0			●
子どもへの周知が足りていない	30	21.6			●
支援者を増やしたいが、募り方がわからない	23	16.5		●	
食材が不足	21	15.1		●	
こどもの居場所(こどもカフェ)が地域に足りていない	20	14.4			●
会場の確保が難しい	19	13.7			●
活動に参加したいが、移動手段がなく来られない人が多い	18	12.9			●
会場使用料の負担が大きい	17	12.2		●	
食料配布・弁当配布の経費の負担が大きい	17	12.2		●	
気になりな子ども、世帯が増え、対応すべきことが増えている	17	12.2			●
気になる親子への個別相談	12	8.6			●
使える助成金があるか分からない	11	7.9		●	
食中毒への対応	11	7.9			●
活動の趣旨を理解しない利用者にストレスを感じる	11	7.9			●
光熱水費の負担が大きい	10	7.2		●	
運営上のノウハウが不足している、知る機会がない	9	6.5			●
ボランティア保険料の負担が大きい	5	3.6		●	
特になし	10	7.2			●
その他	22	15.8			●
回答者数	139				

4 現状と課題

(3) 課題①：マンパワー

(ア) 課題の具体的内容

■ 運営者から寄せられた意見のうち、マンパワーに関する課題としては以下のようなものが見られた。

本来の業務との兼ね合い

今の月に一度の開催では参加者にとっては居場所ではなく「イベント(特別)」といった印象が強いと思われる。しかし、回数を増やそうにも、運営者のそれぞれに本来の業務がありながらの活動なので、正直負担感もあることは否めない。

活動の位置づけ

活動が継続できるような仕組みづくりが、会社で仕事をするような形にできると思います。仕事であれば家族も社会も協力してくれますが、ボランティア活動には家族、社会も理解をしてくれません…ということを思い知りました。

負担の偏り

主催者は人的・時間的・労力的な負担が大きくなる。地域でつくる居場所もよいが、過度な負担がかからないようにして行っていきたい。そのためには、地域住民を支援する方策が必要。

スタッフの高齢化

スタッフの高齢化が進み、現状維持がやっとですが、もう少し頑張りたいと思います。

支援の不足感

市民の協力と意思のある人たちで成り立っていることを行政はもっと分かってもらいたい。

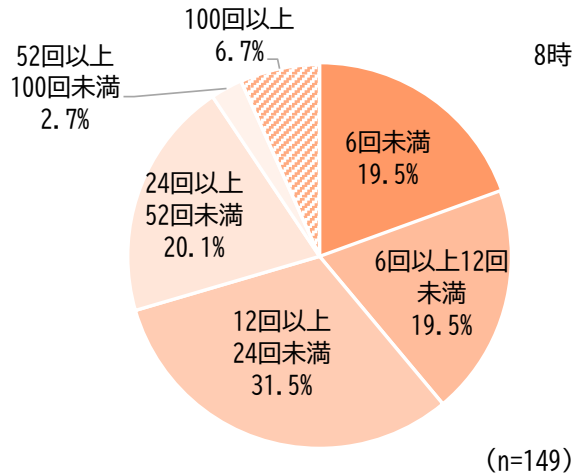
4 現状と課題

(イ) ボランティアスタッフの活動状況

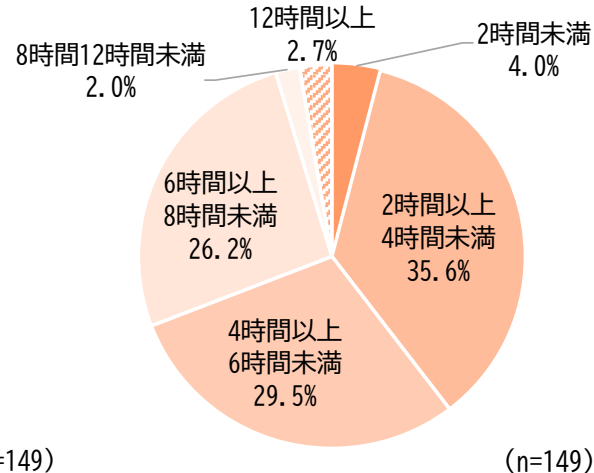
- 運営者への調査によると、活動しているボランティアの人数の平均値は、11.2人である。
- 協力者への調査によると、1年あたりの活動回数は、「12回以上24回未満」（月に1・2回程度）の割合が31.5%で最も高い。
- 協力者への調査によると、1回あたりの活動時間は、「2時間以上4時間未満」の割合が35.6%で最も高い。

活動しているボランティアの人数（平均値） 11.2 人

図表26 1年あたりの活動回数

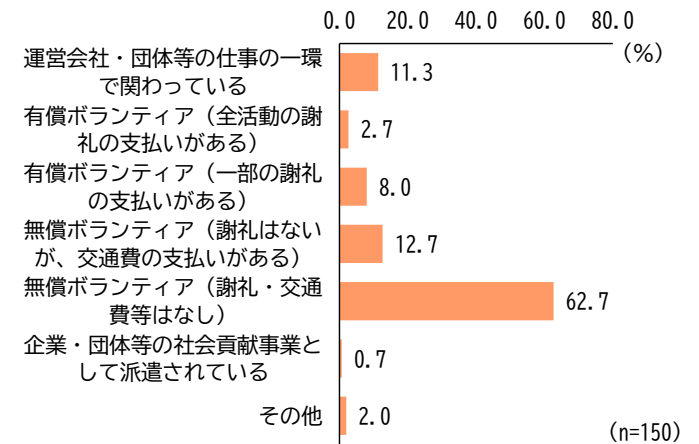


図表27 1回あたりの活動時間数



- 協力者への調査によると、活動の形態は、「無償ボランティア（謝礼・交通費等はなし）」の割合が62.7%で最も高い。

図表28 活動の形態

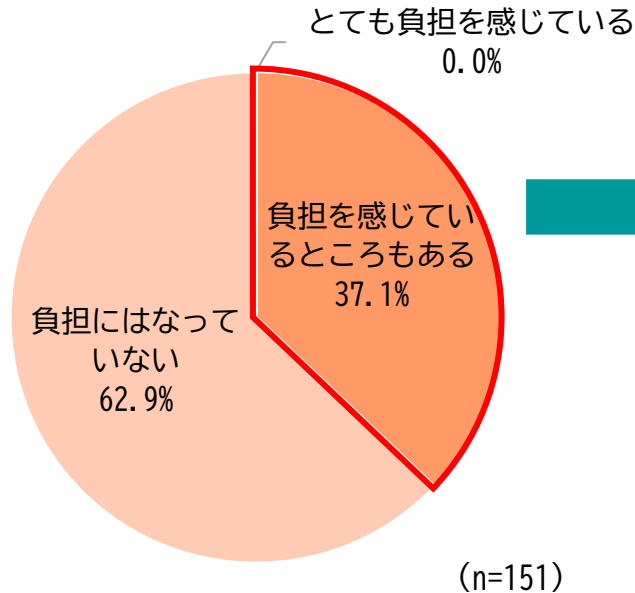


4 現状と課題

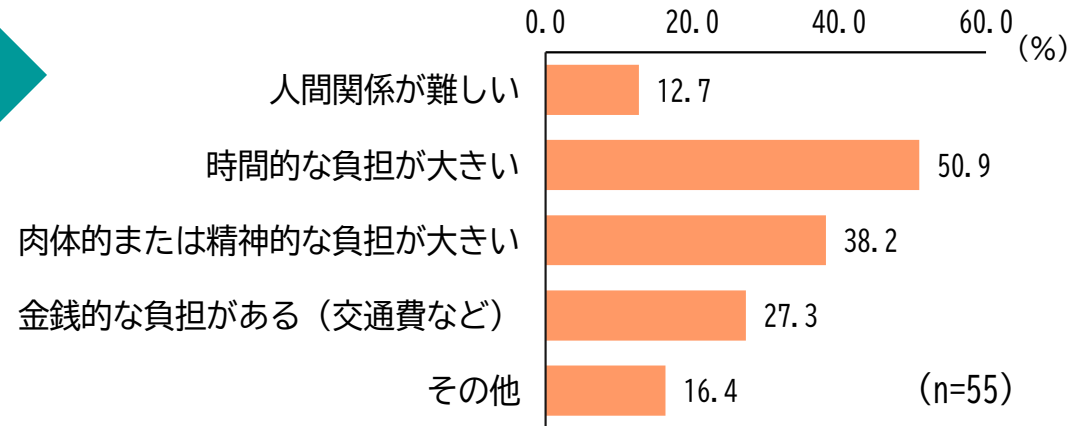
(ウ) ボランティアスタッフにおける負担感

- 協力者への調査によると、活動が「負担にはなっていない」の割合が62.9%、「負担を感じているところもある」が37.1%となっており、約4割が何らかの負担を感じている。
- 負担を感じている人における、負担を感じる点は、「時間的な負担が大きい」の割合が50.9%で最も高く、次いで「肉体的または精神的な負担が大きい」が38.2%である。

図表29 活動による負担を感じているか



図表30 回答対象：「とても負担を感じている」または「負担を感じているところもある」と答えた人
負担を感じる点【複数回答】



運営の課題の一つであるマンパワー不足の解消のためには、
運営者や協力者が**過大な負担を感じることなく活動を継続できる体制**を築くとともに、
協力者を増やしていく必要がある

(4) 課題②：資金・物資

(ア) 課題の具体的内容

■ 運営者や協力者から寄せられた意見のうち、資金や物資に関する課題としては以下のようなものが見られた。

助成金制度の量的な不足

助成金に関しては、公益財団法人や民間の支援制度は多いと感じますが、市町村自治体の支援制度は少ない気がします。

助成金制度の制約の多さ

「こども」に限定せず地域の持続維持のための活動をしています。そのため「日用品」も配布しています。食品についてもそうですが、助成金では運営に係る物品等の購入は認められていますが、食品や日用品の購入は不可であることが多く、実際には使いづらいのが現状です。そのため、企業に「寄付」の依頼等をお願いしています。

こどもカフェの助成金を3年のみでなく延長していただきたい。

要のスタッフは、有償で活動してもらうことで、密度も、効果も違う。しかし、助成金に、役務費を認めていないため、その部分を寄付や会費回収で賄わねばならないのは、継続的運営をする上で、大きなハードルになる。ぜひ、役務費が重要な経費であることを認識した助成制度を創設してもらいたい。

物資の不足

子供食堂を運営するうえでの一番の問題は運営するための資金です。当区のように市街地から遠く離れている地域は食材等の支援を受けることはなく、地域差を感じております。

情報の不足

今年の物価高騰や助成金終了で運営不安であり、参加料（大人）を300円から500円に上げ、理解を得て開催。できれば開催（毎年4月より）前に、助成金などの情報提供いただけるとうれしいです。

活動継続への不安

活動費もほぼ助成金頼みなのでいつまで活動ができるか不安もある。

4 現状と課題

(イ) 必要経費の状況

- 1回開催するにあたっての金銭的支出の平均値は40,068円、中央値は17,000円である。人件費の試算も含めた場合の、利用者1人あたりでは平均値2,801円、中央値769円である。
- 費目の内訳の平均値を見ると、大きいものから、「食材費」が14,665円、「謝金」が8,608円、「その他経費」が6,477円、「賃借料・会場使用料」が4,779円などとなっている。

図表31 利用者数別 1回あたりの必要経費等の平均値・中央値

単位：円

利用者数	n	①金銭的支出		②人件費		金銭的支出+人件費 (①+②)		利用者1人あたり	
		平均値	中央値	平均値	中央値	平均値	中央値	平均値	中央値
全体	139	40,068	17,000	20,678	4,990	60,746	25,340	2,801	769
1～10人	23	62,760	8,250	9,112	4,990	71,872	12,492	8,348	2,435
11～20人	28	35,081	8,560	33,362	4,990	68,443	15,275	3,616	900
21～30人	20	18,510	14,250	34,905	3,992	53,415	19,594	1,843	677
31～50人	32	25,968	20,700	18,557	6,986	44,524	26,832	1,057	691
51～100人	24	39,774	24,550	14,076	4,990	53,849	32,491	763	480
101人～	12	82,329	64,826	8,400	4,990	90,729	69,816	597	400

※②人件費は無償ボランティアの1回あたりの稼働時間と長野県最低賃金（令和7年3月時点）の積

図表32 1回あたりの費目別必要経費の平均値・中央値

項目	平均値	中央値
食材費	14,665円	8,000円
光熱水費	2,104円	0円
需用費	2,492円	1,500円
謝金	8,608円	0円
賃借料・会場使用料	4,779円	0円
保険料	1,087円	0円
感染防止対策費用	440円	0円
その他経費	6,477円	0円

項目	平均値	中央値
無償ボランティアの活動時間	20.7時間	5.0時間

※多くの費目において経費がかかっていない団体が半数を超えている一方で、突出して大きな経費がかかっている団体があることから、平均値と中央値の差が大きくなっている。

4 現状と課題

- 本調査で得られた情報をもとに、回答団体（139団体）及び県内団体（329団体）の、現在の実施回数と希望する実施回数における年間の必要経費を推計した。
- 県内329団体の、現在の実施回数における年間推計は約4億5,608万円であり、希望する実施回数における年間推計は約7億1,555万円である。

図表33 運営費の年間推計

【前提条件】

基本情報	
アンケートの回答団体数	139団体
県内こども食堂・多世代の居場所の実施団体（みらい基金）	329団体
現在の年間実施回数（運営者調査）	34.1回
希望する年間実施回数（運営者調査）	53.5回

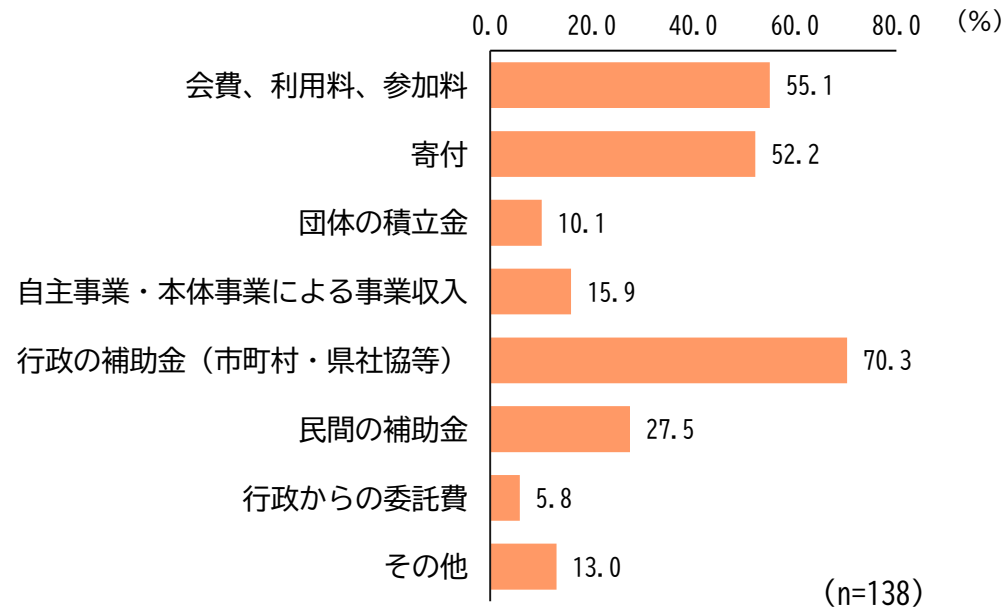
【推計結果】

	1回あたり(円)	現在の実施回数における 年間推計(円)	希望する実施回数における 年間推計(円)
1団体あたりの運営費合計	40,653	1,386,267	2,174,936
回答団体数139団体の金額(推計)	—	192,691,155	302,316,035
県内329団体の金額(推計)	—	456,081,942	715,553,780

(ウ) 事業費の調達状況

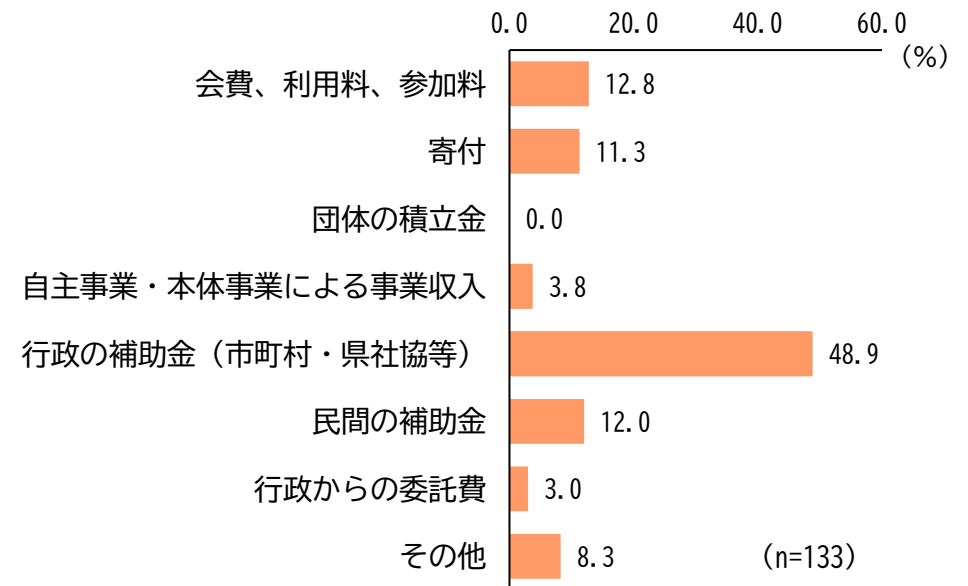
■ 事業費の調達手段では、「行政の補助金」の割合が70.3%で最も高く、次いで「会費、利用料、参加料」が55.1%、「寄付」が52.2%となっている。

図表34 事業費の調達手段[複数回答]



■ 最も多くの額を調達している手段では、「行政の補助金」の割合が48.9%で最も高い。

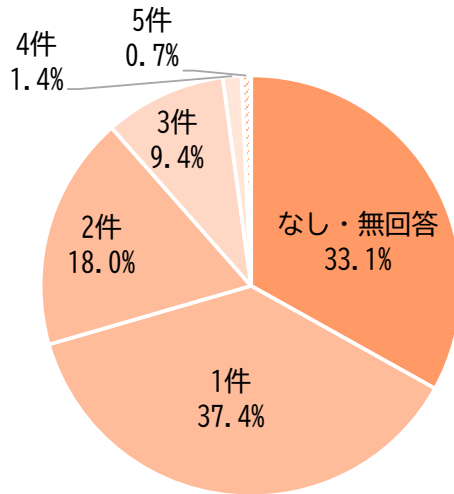
図表35 最も多くの額を調達している手段



4 現状と課題

- 助成金・補助金の件数は、「1件」の割合が37.4%で最も高く、次いで「なし・無回答」が33.1%である。
- 件数の平均値は1.1件である。
- 金額の平均値は462,549円である。

図表36 助成金・補助金の件数



(n=139)

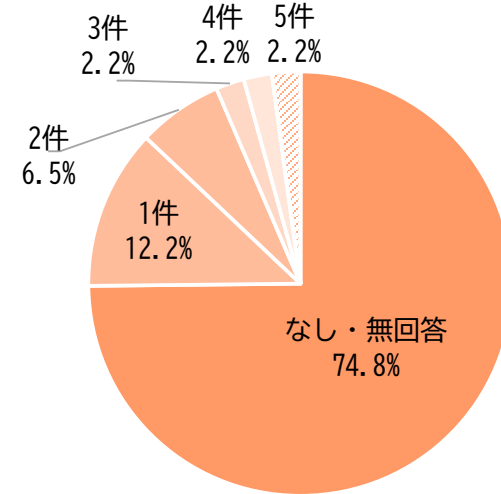
図表● 助成金・補助金の状況

件数（平均値）	金額（平均値）
1.1件	462,549円

※「なし・無回答」を含む

- 寄付の件数は、「なし・無回答」の割合が74.0%で最も高く、次いで「1件」が12.2%である。
- 件数の平均値は0.5件である。
- 金額の平均値は31,216円である。

図表37 寄付の件数



(n=139)

図表● 寄付の状況

件数（平均値）	金額（平均値）
0.5件	31,216円

※「なし・無回答」を含む

居場所の運営において、助成金・補助金の果たしている役割は大きい
また寄付は、今後、拡大できる余地があると考えられる

今後、資金不足の解消に向けて、**助成金・補助金の枠の拡大**や**寄付のさらなる獲得**が目指される

5 今後に向けて

(1) 子どもの居場所の意義

■ 運営者から寄せられた意見の一部を抜粋して掲載する。

子どもの居場所の必要性や今後の希望・展望

近所のおばあちゃんに、お姉ちゃんに、おじちゃんに困ったら助けてもらっていいんだと感じてもらえる居場所が日本に増えていけるよう、国や行政からの援助を望みます。

子どもたちの身近なところに居場所が増えるといいと思います。

子ども食堂に集まっている人は貧困だけではなく、不登校のお子さん、特別な支援が必要なお子さん、LGBTのお子さんなど、様々な困難を抱えている。そういう子どもや保護者の方の居場所（元気の源）になる子ども食堂を目指している。

子ども自身への支援の居場所か、地域コミュニティの場としての居場所か迷うことが多いです。地域の中で子どもは育っていきませんが、大勢の人を集めての居場所の開催ではなく、少人数になってしまいましたが、子どもだけの育ち合いの場の必要性も感じています。

効果～問題解決

居場所支援として進めてきたこども食堂だが、昨今の物価高の影響もあり、相対的貧困の手前の収入を得ている世帯の支援につながっているように思う。公的な制度の恩恵を受けられない世帯にとって、夕食の手間を月1回はぶき、さらに地域とのつながりが少なからず得られるこども食堂は、地域の福祉資源として考えられる。

効果～交流や子どもの成長

子どもの居場所づくりの会では、子どもと高齢者がともに集える場所にしようと活動している。地域の子どもと高齢者がともに集い、地域そのものが大家族のような環境になれば！その為の環境づくりととらえて活動を続けていきたい。

5 今後に向けて

子どもを巡る環境～社会状況全般

現在の日本社会は資本主義社会に参加して稼ぐこと>子育てという関係に私にはみえるのですが、プラットフォームに参加している人たちはどのような関係に見えているのか、そして本当にそのような関係ならば、どこをどのように変えれば良いのか、を話し合う場があるといかな、と思いました。

本当に困窮している家庭の子どもの支援は「子ども食堂」なのかももう一度現状をよく見て欲しいと思います。地域振興・住民ボランティア参加活性化のための「子ども食堂」（子どもカフェ）なら、貧困対策名目の予算や寄付、補助金を一律に安易に充てないことが必要だと思います。子どもの貧困対策は「貧困と学歴の連鎖」を心配する子どもたちの声（H27アンケート）に立ち戻って、それに応える施策に予算や補助金を充てるべきかと思います。

〇〇ハラスメントだらけ、規制が厳しくなり、物価も上がり賃金は据え置き状態で、結婚して子供を持つ気になるのでしょうか？もっと、おおらかな世の中で有って欲しいです。

子どもを巡る環境～教育を取り巻く環境

殺伐とした現代社会にあって、全国で73万件のいじめの過去最高の件数のニュースや不登校児童生徒41万件、職員の療養休暇取得者数7900人余等、子どもを含めた教育を取り巻く環境の悪化を考えてみても、こども食堂のもつ使命は極めて大きいと言えると思います。全国や教育関係者、福祉関係者に幅広く、子ども食堂の成果や課題を伝えていくべきだと私たち社会福祉法人の一員として日々、感じております。これからも、ご支援やアドバイス、情報提供等をよろしくお願いします。

学校は<地域に開かれた学校>などのスローガンを掲げることは多いが、しばしば形だけに終わって本当に開いていく態勢をとることはあまりないように感じる。教員に課される負担があまりにも大きいため、気持ちはあっても定式的な教育活動の枠から飛び出すことは精神的にも物理的にもなかなか困難なのだろうと理解はしているが。

課題～ネットワーク構築・行政への期待

行政の子育ての部署と教育関係の部署の連携が取れているのかと疑問に感じる事がある。学校側がもう少し居場所等、民間の支援活動に関係深く連携をとれる様になると良いと思う。

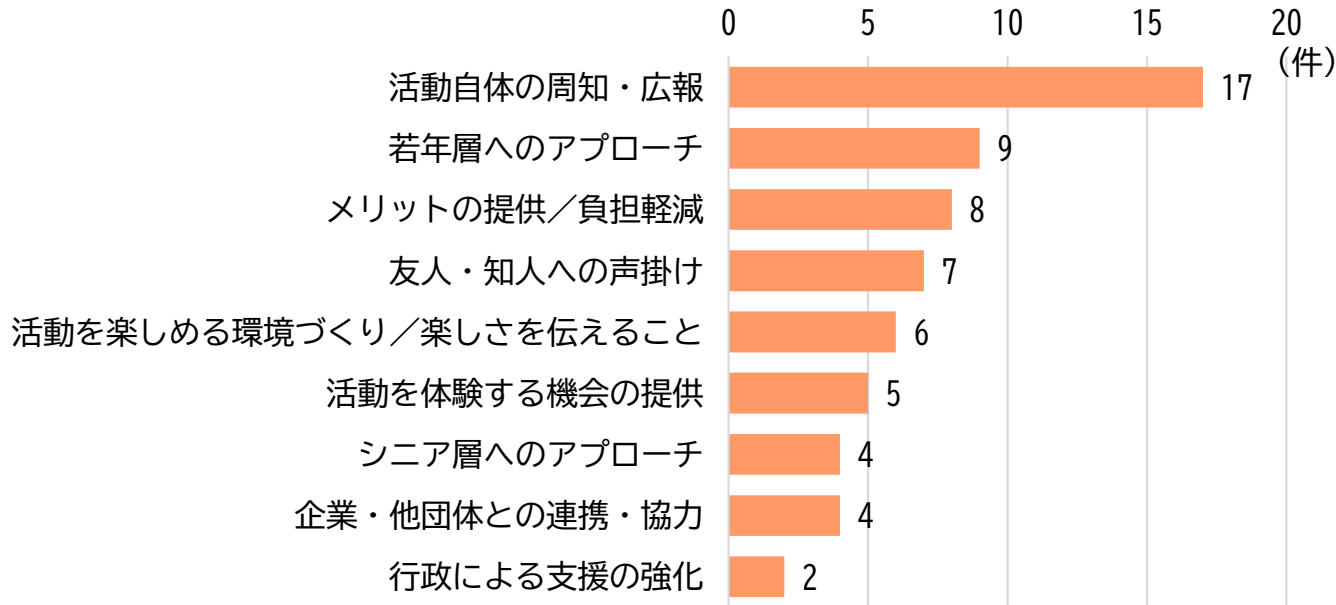
地域の自治体との連携支援を早急にお願いしたいです！！

月2回おこなっていただいている「フレッシュフード」も希望団体が増えてきており、物資を取りに行く時間や運搬費も含め課題であると感じます。在庫食品を抱えている企業様やNPOでは物資管理が難しく廃棄、処分にコストがかかっていると思います。今後も情報交換、連携していけば、継続して活動していく団体や、救われるご家庭も増えていくと思います。個々の団体がそれぞれで頑張るのではなく、物資関係はうまく循環できたらと思います。

(2) 協力者を増やすためのアイデア

- 協力者に対して、協力者を増やすためのアイデアを聞いたところ、「活動自体の周知・広報」(17件)や「若年層へのアプローチ」(9件)といった意見が寄せられた。

図表38 協力者を増やすためのアイデア[自由記述]



活動自体の周知・広報

気軽にネットで調べられるQ&Aサイトなどがあるといい。

どんな活動をしているのか、広報やLINEなどでも情報を流す。

場所を提供してくださる方や食材を提供してくださる方、色々な形で協力していただける方を探す。

若年層へのアプローチ

中高生へのアプローチなどあれば興味を持つ人がいる可能性があると思う。学校へ行けていない中高生にも目に留まる様だとより良いと思う。

学生にフォーカスをして内容を見てもらいやすいツールを使用したりする。

企業・他団体との連携・協力

企業の方の受入。会社の社会貢献活動の一環としてPRできると思う。

友人・知人への声掛け

とにかくボランティアさんを増やすために、私は友達ひとりずつに話しています。介護の終了した友達を狙い撃ちしております。

活動を体験する機会の提供

興味のある方にはとりあえず1回お手伝いとして参加してもらいたいです。

メリットの提供／負担軽減

時間と経済的な負担の軽減。子育て世代が中心に開催するのであれば、スタッフの子どもが楽しく過ごせている必要も感じる。

謝礼を出す。

6 まとめ

居場所の概要

- 運営者調査へ回答のあった居場所の主な開催目的は、「こどもの居場所づくり」や「多世代交流・地域でのつながりづくり」である。
- 主な活動内容は「食事提供（食料配布を含む）」や「多世代交流」である。
- 1回あたりに集まる概ねの利用者数の平均値は44.7人である。
- 運営者、協力者、参加者（子ども・保護者）として、幅広い年代の人が関わっている。

居場所の効果

【子どもへの効果】

- 参加している子どもたちの約6割が、居場所への参加を通じて、「さまざまな体験をした」と感じている。また、居場所で友達と一緒に過ごすことが多くの子どものにとって楽しい経験となっている。
- 保護者や運営者・協力者にも、居場所が子どもにとって多様な体験の場となっていることや、子どもの表情が明るくなっているなどの効果が感じられている。



【保護者への効果】

- 保護者の7割以上が、居場所で「楽しい時間を過ごせている」、「ほっとできる場所になっている」と感じている。
- 保護者の多くは、居場所を利用する前は「生活に本当に困っていないと行ってはいけなところ」といったイメージを持っていたものの、実際に訪れてみたら「誰でも参加できる場所」や「コミュニケーションの場所」にイメージが変化したと答えている。

【協力者や地域への効果】

- 協力者の7割程度が、居場所における活動を通じて、やりがいや、様々な世代の人との関わりを手ごたえとして感じている。

現状と課題

- 運営者調査によれば、居場所の実施回数の平均値は34.1回/年、本来実施したい回数の平均値は53.5回/年で、その差は19.4回である。
- 一方、保護者調査によれば、居場所の利用回数の平均値は15.3回/年、本来利用したい回数の平均値は20.1回/年で、その差は4.8回である。
- したがって、運営側、利用側ともに、実際の回数が希望の回数を下回っている。
- 運営者が感じている主な課題としては、「運営者など特定の人にかかる負担が大きい」「ボランティアが不足している」といったマンパワーに関わるものと、「食材費の負担が大きい」「運営資金が不足している」といった資金・物資に関わるものがある。

【マンパワー】

- 運営者からは、活動の社会的な位置づけや、支援の不足感、スタッフの高齢化といった観点で課題があるとの声が寄せられている。
- 活動しているボランティアの人数の平均値は11.2人である。協力者の活動形態は「無償ボランティア」が6割以上となっている。
- 協力者の3分の1以上が、活動による負担を多少感じている。そのうち約半数は、時間的な負担があると答えている。

【資金・物資】

- 運営者からは、助成金制度の量的な不足や制約の多さへの指摘とともに、物資の不足に対する懸念や活動継続への不安の声が上げられている。
- 1回の開催にあたっての金銭的支出の平均値は40,068円である。
- ここから、県内329団体が、希望する実施回数を実現するために1年間に必要となる金額は、約7.2億円である。
- 事業費の調達手段の中心は助成金や補助金で、平均で1.1件、約46.3万円が活用されている。寄付は平均で0.5件、約3.1万円となっている。